

和島先生を偲んで

岡 本 道 雄

和島芳男先生は、明治三十八年六月一日東京に生まれ、昭和四年東京帝国大学を卒業され、仙台の尚絅女学校で五年間教鞭をとられたのち、昭和十年から神戸女学院に奉職されたのであるが、爾来三十六年間、昭和四十年定年によりお引きになり名誉教授になれるまで、その生涯の半ばを神戸女学院の教壇の上で過ごされ、神戸女学院のために大変盡力された方であった。

この神戸女学院在任中の先生は、昭和十一年、専門学校教授、昭和二十三年新制大学開設とともに文学部社会学科教授として、専門の日本史を講じ、またその分野に関する着実な研究を積み重ねられ、豊かな学識と明晰な講義で学生たちの信望を集め、さらに七年にわたって社会学科の学生主事として学生の指導にあたり、また自治会文化部および諸クラブ顧問として学生の文化活動の指導にも努力を惜しまれなかった。そして先生は、東大の学生時代にある教授が「私は学生諸君をジュントルマンとして扱う」と言われた言葉に大変感銘を受け、御自身これをモットーとして、学生たちをレディーとして扱い、学生たちが自主性と責任感を持つように指導されたのである。また一方、学内での主要な役職―図書館長、社会学科主任、評議員、その他の各種委員を歴任、学院の管理・運営面で多くの貢献をされ

たのであるが、とりわけ、昭和四十一年よりの三年間は神戸女学院大学第四代学長の責を担い、当時懸案であった家政学部の開設を実現に導くなど、大いに力をつくしておられる。

和島先生の専門分野は日本史の中でも特に、中世、近世の日本思想史であり、先生はこの分野で大変生産的な、また活潑な研究活動を展開され、多くの著書、論文等の学問的業績を残された。中でも特に先生が昭和三十七年、学位申請論文として東京大学に提出され、文学博士の学位を受けられた、『日本宗学史の研究』はその中心的な労作と言えるであろうが、この書物に関連して『中世の儒学』『昌平校と藩学』等の著作もあり、これら一連の「宋学を受容」に関する和島先生の研究は、二十余年の研究の蓄積の成果であり、集大成であった。こうした研究の中で、和島先生は、中国儒教の「哲学化」されたものとしての宋学あるいは朱子学が、鎌倉中期にわが国に伝来して以来どのような形で受け容れられ、またそれがどのような理解と誤解を受けながら日本独特の発展を遂げ、江戸時代の学問や教育思想になったかを明らかにしようとしておられるのであるが、このような研究は、この分野の研究に新しい視点を与えたユニークなものとして、国の内外で高い評価を受けたのであった。

和島先生はまた、『神戸女学院八十年史』を単独で執筆され、さらに『神戸女学院百年史 総説』の監修・執筆にもあたられた。そしてこれらは、神戸女学院に対する和島先生のいま一つの貢献であるとともに、和島先生のいま一つの分野での学問的業績であると思う。特に『百年史』に関しては、早くからその準備にあたられ、このために「学院史料室」を設置させ、厳密な実証主義的な方法論のもとに『百年史』の作成にあたられたのであり、もしも、『神戸女学院百年史』が単に一つの学校の記録にとどまらず、近代日本キリスト教史、乃至は近代日本教育史として学問的な批判に耐えるものであるとするならば、その功績の多くは、和島先生のこのような用意周到な努力によるところであると思う。

和島先生の最後の仕事となったこの『神戸女学院百年史 総説』の「まえがき」に、先生は次のような意味のことを記しておられる。つまり、「わが国におけるこれからの「キリスト教」は「もはや西洋知識の媒介者たるにとどまらず」、日本の伝統や諸宗教と対決した上で、なお日本に土着化した宗教として「独自の地歩を占めねばならぬ」ということ、またこれからの「国際主義」というものも従来のような単なる「欧米文化の受容にとどまらず」、これからは東洋文化と西洋文化の交流促進がもっと必要であり、また「日本文化の国際的研究」の推進がもっと必要であるということである。これは、日本思想、東洋思想の研究者であり、同時に、熱心で篤信のクリスチャンである和島先生の、永年にわたる識見であった、そしてこのような考えのもとに神戸女学院大学内に日本研究の課程を含む学科の新設を望み、その検討をすすめておられた。これは先生の在任中は機が熟さなかったのであるが、昭和五十一年に大学に日本文化系の課程を含む総合文化学科が設立され、さらにまた五十五年には大学院に日本文化学専攻の修士課程も置かれるに至り、和島先生の当時のお考えは十分生かされていることと思う。

先生は、学長の任期満了後、昭和四十六年三月定年退職され、名誉教授に推され、次いで大手前女子大学教授となられたが、先述のように『神戸女学院百年史 総説』刊行のために、退任前に礎を置き『八十年史』執筆以来の歴大な史料ファイルをお残しになった史料室を訪れては、御自身の分担部分の執筆の準備にいそしみ、また、監修者としてあるいは指導者として、他の共同執筆者たちの照会に応じ、激励するなどの労もとられたのであった。

四十九年七月以来のパーキンソン氏病のため五十五年三月に大手前女子大学を辞任されたが、同年四月勲三等に叙せられ、瑞宝章を授与されておられる。辞職後は自宅において療養につとめられ、五十七年のイースター礼拝には小康をえて久々に神戸教会の礼拝にご家族共々出席されたが、その後四月十五日、淀川キリスト教病院に入院、奥様はじめご家族の方々の献身的な看護を受けておられた。

今年二月に入って、和島先生の容態が思わしくないと、報に接し、心を痛めていたのであったが、ついにその月末の二十八日午後二時すぎ、先生御逝去の知らせを受けた。享年七十七歳。

私は昭和三十五年に神戸女学院に奉職した。爾来、和島先生とは約十年間この学園で一緒に過ごしていただき、同じ社会学科のメンバーとして色々御指導に与り、また特に、和島先生の学長在任中は、新学科の構想の検討にも参画させていただいて、種々交渉も多く、様々の苦勞を共にしたこともあり、親しくしていただいていた。先生が四十六年に定年退職されたのちも、『百年史』の監修のためたびたび岡田山に上って来て下さった頃は、時々はお話をする機会もあった。そしてこのような折りにふれての話し合いの中から感じられたのは、和島先生の神戸女学院に対する変わらざる愛情であり、神のみ名によって建てられた神戸女学院が正しく発展することへの期待であった。

私は、神戸女学院を終生愛された偉大な先輩をまた一人失ったという寂しさと大きな空白とを感じる。先生の御交宜・御盡力に応える道は、先生のお考えや識見からいま一度学び、それをできるかぎり未来に生かしてゆくことであろうと思ひながら、先生の生前の御指導に対し改めて深く感謝申し上げるとともに、天上にある先生のみ霊の平安をお祈りする次第である。